

看護基礎教育におけるeポートフォリオ学習の実践報告（第三報） ー老年看護学におけるルーブリック評価の試みー

山崎 尚美¹⁾, 南部 登志江¹⁾, 島岡 昌代¹⁾, 宮崎 誠²⁾

¹⁾ 畿央大学健康科学部看護医療学科（〒635-0832 奈良県北葛城郡広陵町馬見中4-2-2）

²⁾ 畿央大学教育学習基盤センター（〒635-0832 奈良県北葛城郡広陵町馬見中4-2-2）

E-Portfolio practice report of nursing education (3rd Report) - Introduction of rubric evaluation in the field of gerontological nursing -

Naomi YAMASAKI, Toshie NANBU, Masayo SHIMAOKA, Makoto MIYAZAKI

¹⁾ Department of Nursing, Faculty of Health Sciences, Kio University

(4-2-2 Umami-naka, Koryo-cho, Kitakatsuragi-gun, Nara 635-0832, Japan)

²⁾ Center for Teaching, Learning and Technology, Kio University

(4-2-2 Umami-naka, Koryo-cho, Kitakatsuragi-gun, Nara, 635-0832, Japan)

背景

近年の高齢社会の到来とともに、わが国は平均寿命の延長とともに長寿大国となった¹⁾。そして、その社会的背景を鑑みて平成元年度の看護基礎教育のカリキュラム改正では、成人看護学から老年看護学が独立し、平成7年度の改定では在宅看護論という学問が新しく体系化の一部となった²⁾。

一方で、看護職を目指す学生は入学の動機や学習の目的が明確でないまま大学に進学しているものも少なくない。そのような環境のなかで、看護学生のレディネスも年々変化しており、学習こそは続けているものの受動的な学習スタイルであり主体的な学修でなかったり、根拠のない評価を行っている傾向にある。

しかし、看護実践の場においてはカンファレンスや多職種連携の際には、アサーティブかつ主体的・論理的な思考を要求されることが多い³⁾。このことは、学士課程においてカークパトリックの提唱する「4段階評価モデル」のReactions(レベル1:反応)およびLearning(レベル2:学習)の段階の修得の必要性を示している⁴⁾。

そこで、今回筆者らは学生の主体的な学修を助けるための授業設計および評価を実践するために2016年から看護医療学科では一部の科目においてNursing e-Portfolio for Student (以下、NEPS)プロジェクトを立ち上げ実践した。このことは、老年看護学の授業設計が看護医療学科のDiploma Policy(以下、DP)に基づいた組み立てになっているか否かを評価でき、かつ教員間のファカルティ・ディベロプメント活動(以後、FD活動)にもつながると考えた。

eポートフォリオ学習とは、学生が探究活動や課外活動、資格・検定等の実績をインターネット上に蓄積する「学びのデータ」を活用して、学生が蓄積したものを教育指導に役立てたり、授業設計の改善に活用することを目的としている。また、ルーブリック評価とは、学習者のパフォーマンス（行動）の成功の度合いを示すレベルと、それぞれのレベルに見られるパフォーマンスの特徴を説明する記述で構成され、評価基準の記述形式として定義される評価ツールである⁵⁾。詳細は第一報のとおりである。

この報告では、老年看護学の講義・演習におけるルーブリック評価の試みについて、NEPSプロジェクトの実践内容とその成果を報告する。

国内外のeポートフォリオ学習および研究の動向

以下にeポートフォリオ学習および研究の動向を示す。国内文献は、看護基礎教育における学習の効果についてインターネットを使用して検索したところ、報告・報告書が12件、原著論文が1件、資料が2件該当した。内容についてはeポートフォリオシステムの開発・導入・活用4件、eポートフォリオを活用した評価の報告が1件、ティーチング・ポートフォリオの活用が1件、ルーブリック導入・開発が2件、ルーブリックを使用した効果が2件、学習目標の作成2件、その他、学習評価システムの構築や論理的思考テストの開発に関する文献が1件ずつ見られた。

以上の内容から、国内における看護基礎教育の学習効果については、eポートフォリオの導入から活用の実際を紹介した文献は比較的多くあったが、評価までを検討した文献は1件のみであった⁵⁾。また、ループ

リックについても開発や使用した効果はいくつか見られたが、いずれの文献も報告レベルであり、原著論文として発表された内容ではなかった。これらのことから、国内での看護基礎教育におけるe-ポートフォリオ学習および研究は現段階では少なく、今後増加していくことが予測された。

老年看護学分野におけるルーブリック評価の導入の現状

国内文献は医中誌WEBを使用し「老年看護」「基礎教育」「評価」をキーワードにすべての文献を検索したが、該当するものは見当たらなかった。老年看護を削除すると40件の文献が該当したが、今回の論文作成に有効と思われる内容のものは見当たらなかった。同様に、「老年看護」「基礎教育」「評価」のキーワードでCiNiiを検索したところ、6件の文献が該当した⁶⁾⁷⁾⁸⁾⁹⁾。閲覧可能な文献3件について内容を吟味し2件の論文を対象とした。

いずれの施設もe-ポートフォリオを利用した記述はみられなかった。論文の内容は1件が看護学生の高齢者イメージの変化を評価しており、1件は講義内容および新規開講科目についての授業評価であった。書籍では、高齢者との交流とグループワークを評価した事例や授業展開の事例の報告があった^{10) 11)}。これらの結果から、老年看護における基礎教育の評価では先行文献が少なく、今後は実践に基づくエビデンスの高い内容の研究を進めていく必要性が示唆された。

科目の構成

老年看護学領域で作成・実施した授業ルーブリックと開講時期は、2年次前期に老年看護学対象論(講義)、2年次後期に老年看護学援助論Ⅰ(講義・演習)、3年次前期に老年看護学援助論Ⅱ(講義・演習)である。

そして今回は報告内容の対象とはしていないが、1,2年次の講義・演習の後に3年次後期に学修を積み重ねていくという学習形態となっている。

方法

1. 授業ルーブリックの作成

以下のとおり、老年看護学における授業ルーブリックの作成を実施した(第一報参照)。

- 1) 学科内の教員間でe-ポートフォリオ学習について約1年間かけて学習会を実施した。
- 2) 学習する過程において、科目ごとにルーブリック評価案を作成し、内容妥当性を確保した。
- 3) 老年看護学に精通した教員とe-ポートフォリオ学習の専門家とともに数回の検討を繰り返し、ルーブリック評価の内容妥当性を確保した。

- 4) CEASの補足URLの欄に設計したルーブリック評価表を割り付けした。

2. 実施期間と対象

- 1) 実施期間：2017年9月から2018年8月
- 2) 対象：看護医療学科のうち同意した2回生103人中63人・3回生98人中73人

4. 倫理的配慮、

学生には、初回授業の開始時にNEPSの趣旨、個人情報保護、同意を得たあとでも撤回できることを成績評価に関係しない他分野の協力者に書面と口頭で説明してもらい、書面で同意を得た後に、ルーブリック評価表に直接入力してもらった。また、本論文の投稿に関しては、日本看護協会の倫理綱領および日本老年看護学会の倫理規定に準じて、学生に事前に大学紀要に掲載することの同意を得ている。

授業ルーブリックの実際

作成した授業ルーブリックは以下のとおり実践した。

初回のガイダンス時に各科目の学修のキーワードと到達目標・評価法を示した授業計画を配付し、評価法として課題レポートを説明し、記録物はPDF化するように説明した。その際には、NEPSプロジェクトの趣旨説明書および参加同意書を作成し同意を得た。

授業ルーブリックの説明は、2017年度後期は、授業の中間回(7回目)と授業の最終回(15回目)、2018年度前期は、授業の中間回(7回目)と授業の最終回(15回目)に評価するよう説明し、その説明は科目責任者の強制力が働かないように、科目責任者以外の教員が行った。学生には授業ルーブリックの目的として①ルーブリックの評価基準を使って自分の学修到達度を自己評価することで学びを深める機会を作る、②自己評価を集計して授業改善に役立てる、ことを説明した。また、実施の手順書を配付して具体的なCEASの操作方法を説明した。

学生は、自分のモバイルパソコンからCEASの授業科目の共通ページに設けた授業ルーブリックにアクセスし、表示されたリストのコンピテンシー名を選択し、4段階の各達成度を選択して自己評価を行い、根拠となるファイル類を登録、自己評価が妥当である理由や今後の課題についてコメントを記入し保存した。

学生の自己評価は、「S：Super；遥かに発展的」を4、「A：十分満足できる；充分達成」を3、「B：概ね満足できる；おおむね達成」を2、「C：努力を要する」を1として点数化し、各教育内容の平均値を確認した。分析・評価としては、入力したルーブリック評価表の記述統計量を算出し、平均得点と特徴的なレーダー

チャートについて分析した。そして、学生へのフィードバックおよび学習目標等の見直しを行った。

結果

老年看護学援助論Ⅰ，老年看護学対象論，老年看護学援助論Ⅱの3教科について、すべての項目についても、中間評価である1回目より、最終評価である2回目の点数が上昇していた。

1）老年看護学対象論におけるルーブリック評価

老年看護学対象論は、2回生103人中67人が同意し、1回67目人、2回目56人の記入があった。学生の記入率

表1 老年看護学対象論のルーブリック評価内容と得点
(1回目:103人、2回目:93人)

DP	1回目	2回目
高齢者の尊厳の理解 ・医療従事者として、人間の尊厳や生命への畏敬について理解し、人の痛みや健康への願いを汲み取ることができる感性を持っている。	2.07	2.6
高齢者インタビューの実施と学びの共有 チーム医療や高度医療、地域の訪問看護などの場面で、様々な医療関係者と円滑なコミュニケーションを図り協働し、リーダーシップを発揮することができる。	2.82	2.93
高齢者に関する理論の理解 豊かな教養と幅広い視点を持っている。	2.3	2.6
老性変化に伴う高齢者の理解 看護医療分野に関する高い専門性と臨地に役立つ実践力を修得している。	2.49	2.68
フィールドワークの実践 保健・医療・福祉の各分野の専門家との連携・協働の土台となるプレゼンテーションスキルを身につけている。	1.87	2.65
高齢者看護の必要性和国際的な理解 医療をめぐる問題の国際化に対応できる知識・理解力を身につけている。	1.49	2.02
高齢者看護における保健・医療・福祉の統計的理解 修得した知識、研究・調査能力を用い、生涯にわたって自ら学び続けることができる。	1.64	2.35
高齢者医療・保健・福祉の変遷の理解 看護医療に携わる者として、あらゆる生活の場で生じる利用者のニーズを正しく理解し、責任をもって問題を解決していくことができる。	1.76	2.51
合計	15.87	19.87
平均	2.08	2.55

老年看護学対象論



図1 老年看護学対象論レーダーチャートの一例

は1回目は100%，2回目は83.5%であり、2回目は途中で記入をやめた学生が存在していた。学生の自己評価は1回目より2回目が上昇しているが各項目の平均は2.00～2.50でありやや低い傾向があった。

平均点が1回目2.08から2回目には2.55と、0.47ポイント上昇していた。得点の変化が大きかったのは、「フィールドワークの実践」で、1回目1.87、2回目が2.65と0.78ポイント上昇していた。続いて「高齢者看護における保健・医療・福祉の統計的理解」「高齢者医療・保健・福祉の変遷の理解」などの上昇を認めた。「高齢者インタビューの実施と学びの共有」は変化を認めていなかった。

授業時に提示したレポート課題「高齢者インタビューの実施」においては、9割の学生が学修過程の根拠資料として添付していた。

2）老年看護学援助論Ⅰにおけるルーブリック評価

老年看護学援助論Ⅰは、2回生98人名中63人が同意し、そのうち1回目52人、2回目49人の記入があった。老年看護学援助論Ⅰでは、平均点が1回目は1.85であったが、2回目は2.36と0.51ポイント上昇していた。特に変化が大きかったのは「ダイバーシティケア」で、0.73ポイント上昇していた。続いて、「健康障害がある高齢者の理解」「認知症高齢者の理解」「その人らしく生

表2 老年看護学援助論Ⅰのルーブリック評価内容と得点
(1回目84人、2回目79人)

DP	1回目	2回目
健康障害がある高齢者 医療従事者として、人間の尊厳や生命への畏敬について理解し、人の痛みや健康への願いをくみ取ることができる感性をもっている。	1.93	2.55
健康障害を持つ高齢者を支える専門職 チーム医療や高度医療、地域の訪問看護などの場面で、様々な医療関係者と円滑なコミュニケーションを図り協働し、リーダーシップを発揮できる。	1.76	2.15
認知症高齢者の理解 豊かな教養と幅広い視点を持っている。	1.98	2.49
生活機能を整える看護・疾患のアセスメントと看護 看護医療分野に関する高い専門性と臨地に役立つ実践力を修得している	1.54	2.04
老年期に多い症状のアセスメントと援助の要点を記述 保険・医療・福祉の各分野の専門家との連携・協働の土台となるプレゼンテーションスキルを身につけている。	1.99	2.33
ダイバーシティ・ケア 医療をめぐる問題の国際化に対応できる知識・理解力を身につけている。	1.8	2.53
知識の確認 修得した知識、研究・調査能力を用い、生涯にわたって自ら学び続けることができる。	1.83	2.29
その人らしく生きる 看護医療に携わる者として、あらゆる生活の場で生じる利用者のニーズを正しく理解し、責任をもって問題を解決していくことができる。	1.99	2.5
合計	14.07	18.73
平均	1.85	2.36

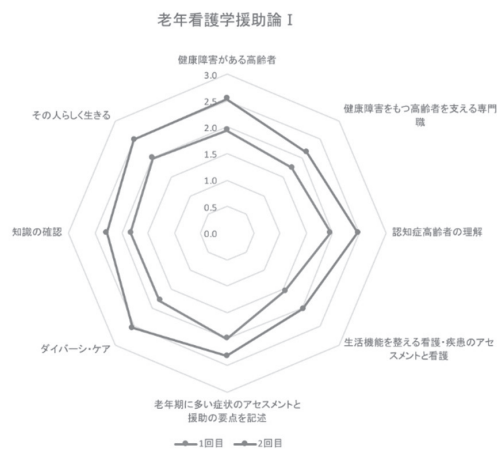


図2 老年看護学援助論Ⅰレーダーチャート
全体の平均得点の推移

表3 老年看護学援助論Ⅱのルーブリック評価内容と得点
(1回目:97人 2回目:94人)

DP	1 回目	2 回目
高齢者疑似体験による学び 医療従事者として、人間の尊厳や生命への畏敬について理解し、人の痛みや健康への願いを汲み取ることができる感性を持っている。	2.89	3.07
グループ学習での学びの共有 チーム医療や高度医療、地域の訪問看護などの場面で、様々な医療関係者と円滑なコミュニケーションを図り協働し、リーダーシップを発揮することができる。	2.8	3.02
対象者援助での根拠を持った援助 豊かな教養と幅広い視点を持っている。	2.59	2.99
事例を用いた対象者理解 看護医療分野に関する高い専門性と臨地に役立つ実践力を修得している。	2.31	2.78
資料の作成とプレゼン 保健・医療・福祉の各分野の専門家との連携・協働の土台となるプレゼンテーションスキルを身につけている。	2	2.46
国際的視点での援助 医療をめぐる問題の国際化に対応できる知識・理解力を身につけている。	1.87	2.46
生涯にわたる学び 修得した知識、研究・調査能力を用い、生涯にわたって自ら学び続けことができる。	2.34	2.68
対象者のニーズの把握と対応 看護医療に携わる者として、あらゆる生活の場で生じる利用者のニーズを正しく理解し、責任を持って問題を解決していくことができる。	2.41	2.81
合計	19.19	22.27
平均	2.4	2.79

老年看護学援助論Ⅱ

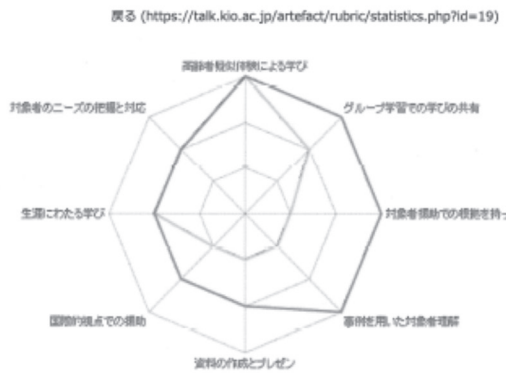


図3 老年看護学援助論Ⅱレーダーチャートの一例

きる」であった。

授業時に提示したレポート課題「認知症の人の理解」については、9割の学生が学修過程の根拠資料として添付していた。

3) 老年看護学援助論Ⅱにおけるルーブリック評価

老年看護学援助論Ⅱは、3回生98人名中73人が同意し、そのうち1回目73人、2回目70人の記入があった。老年看護学援助論Ⅱについては、1回目の平均点が2.4で、2回目が2.79と0.39ポイント上昇していた。特に、変化が大きいのは「国際的視点での援助」で、1回目が1.87で2回目が2.46と0.59ポイント上昇していたが、他は0.4前後であった。「グループ学習での学びの共有」「高齢者疑似体験による学び」は、0.18及び0.22とポイントとやや上昇していた。授業時に提示したレポート課題「認知症の人の理解」については、8割の学生が学修過程の根拠資料として添付していた。

考察

1. 老年看護学における授業ルーブリックの参加状況

学生の記入率は1回目は、ほぼ100%、2回目は約80%であった。いずれも途中で記入をやめた学生が存在していた。学生の自己評価は1回目より2回目が上昇しているが各項目の平均は2.0～2.5でありやや低い傾向があった。個人ごとで1回目から2回目の変化を見ることができるが、2回目から見ると学生の学びの程度を捉えやすい。また、1回目で評価できていない学生を発見し早期にフォローしていくことが必要である。

2. ルーブリック評価結果の傾向

以下、各科目の傾向とその理由について考察した内容をまとめた。そして、これらの科目の中央値が2.5であったため、2.5を基準とした。

1) 老年看護学対象論

この科目では、2.5以上の項目は「高齢者インタビューの実施と学びの共有」「老性変化に伴う高齢者の理解」「フィールドワークの実践」「高齢者医療・保健・福祉の変遷の理解」の4項目であった。これらは、フィールドで身近な高齢者に対してインタビューを実践するといった演習科目であり、またグループワークを展開している。個人ワークした内容をさらにグループワークを行うことでグループダイナミクスとともに共通点や相違点の学修を深めていたと考える。殊に「老性変化に伴う高齢者の理解」での高齢者の心理・社会的変化についてはテキストでは学習できない「その人らしい価値観や生き方そのもの」を高齢者の生の声から学習していると考える。

最も得点が低かった「高齢者看護の必要性和国際的

な理解」については、前期科目では特別講義のような海外招聘ものは取り入れていないため、教員からの学会の紹介などの講義形式のみとなっていたため得点が低値だと考える。通年を通じて、後期科目で補完する必要がある。

2) 老年看護学援助論Ⅰ

この科目では、2.5以上の項目は「健康障害がある高齢者の理解」「ダイバーシティケア」「認知症の理解」であった。この単元は、海外招聘した外部講師の講義を聴講し、レポート提出するといった内容のものであり、認知症についての単元もロールプレイを含む講義と演習の内容である。ただ、座学で講義を聴講するだけではなくグループワークを取り入れている。このことは、老年看護学対象論と同様に情意レベルの学習につながったと考える。また、学生の傾向として、自己評価を低くつける学生がいたため、再度ルーブリック評価表を低くつけがちな表現でなかったか再度検討が必要である。そして、客観的に自己評価を行うことは自己の成長を自覚でき自己効力感の向上につながるため、個人ごと1回目で評価できていない学生を発見し早期にフォローしていくことが必要である。

3) 老年看護学援助論Ⅱ

この科目では、2.5以上の項目は「グループ学習での学びの共有」「高齢者疑似体験による学び」「対象者援助での根拠を持った援助」「事例を用いた対象者理解」「対象者のニーズの把握と対応」「生涯にわたる学び」であった。この科目は、看護過程を展開するといった高齢者のペーパーペーシェントの事例展開であるが、それらの内容が目標に到達したことを示している。どの項目も、自己学習したうえでグループワークを実施しプレゼンテーションするといった構成であり、予習と復習が必須の科目である。

このことは、老年看護学援助論Ⅰと同様にグループワークや演習が情意領域の学習活動に影響したと考える。

以上のことより、老年看護学に関する授業ルーブリックは、講義よりもグループワークやロールプレイなどの演習で目標達成でき2.5ポイント以上の得点が得られていたことが明らかになった。

3. 今後の課題と改善策

今後は、学生の傾向として、自己評価を低くつける学生がいたため、再度ルーブリック評価表を低くつけがちな表現でなかったか再度検討が必要である。そして、客観的に自己評価を行うことは自己の成長を自覚でき自己効力感の向上につながるため、個人ごと1回目で評価できていない学生を発見し早期にフォローし

ていくことが必要である。

本プロジェクトにおいて、ルーブリック評価表の表記を再検討すること、そして講義から演習、さらに実習といった学習形態に展開していくことで、さらにDPに基づいた授業設計になりうると考える。

4. 本教育実践の限界

このプロジェクトの報告は1分野における活動の紹介であり、看護基礎教育全体の教育実践とはいいがたい。よって、今後は他の分野および臨地実習においてさらなる活動を推進していき看護基礎教育および老年看護学の授業構築のあり方を模索していく必要がある。

結語

老年看護学の授業設計を授業ルーブリックで実践した。その結果、老年看護学援助論Ⅰ、老年看護学対象論、老年看護学援助論Ⅱの3教科について、すべての項目についても、中間評価である1回目より、最終評価である2回目の点数が上昇していた。

演習単元や科目で得点は高く、その理由は個人ワークした内容をさらにグループワークを行うことでグループダイナミクスとともに共通点や相違点の学修を深めていたと実感していたと考える。殊に「老性変化に伴う高齢者の理解」での高齢者の心理・社会的変化についてはテキストでは学習できない「その人らしい価値観や生き方そのもの」を高齢者の生の声から学習していると考えられる。ただ、座学で講義を聴講するだけではなくグループワークを取り入れており、老年看護学対象論と同様に情意レベルの学習につながっていた。

謝辞

このプロジェクトに、参加協力してくださった看護医療学科の学生の皆様に深く感謝いたします。なお、本プロジェクトは、畿央大学平成28年度教育改革事業の助成をうけて実施した。

文献

- 1) 平成28年版厚生労働白書：－人口高齢化を乗り越える社会モデルを考える－, [https://www.mhlw.go.jp/wp/hakusyo/kousei/16/\(2018年10月4日閲覧\)](https://www.mhlw.go.jp/wp/hakusyo/kousei/16/(2018年10月4日閲覧))).
- 2) 厚生労働省：看護基礎教育の充実に係る検討会報告書,P4,2007.
- 3) Seiko Sudo, Tomoko Kobayashi, Yuhak Im, Naomi Yamasaki, Toshie Nanbu :

Literature Review of Independent Thinking
Nursing Students in Japan, .

TNMC & WANS International Nursing
Research Conference, 2017.

- 4) 鈴木克明: 研修設計マニュアル 人材育成のための
インストラクショナルデザイン, 北大路書
房,P11,2015.
- 5) 石垣明子:大学におけるルーブリック評価の開発
—医療人文学科目における社会人基礎力を涵養す
るルーブリッカー, つくば国際大学研究紀
要,No.22,2016.
- 6) 鈴木敏恵:ポートフォリオ評価とコーチング—臨
床研修・臨床十種の成功攻略!.医学書院, 2006.
- 7) 北素子,嶋澤順子,高橋 衣ら:看護学生の主体的学修
力獲得を支援するelectronic-portfolioシステムの
導入,JUCE Journal ,No.1,2015.
- 8) 西垣佳織 富岡晶子 平田美和看護基礎教育での
臨地実習において学生が達成する能力の明確化—
A大学看護学科でのルーブリック導入検討に関す
る取り組み—,東京医療保健大学紀要,第12巻,第1
号,1-8,2017.
- 9) 井内伸栄, 小林菜穂子, 田中希穂:看護学実習を
支援する評価システムの構築と看護学実習を支援
する評価,大阪信愛女学院短期紀要,第49集,39-
44,2015.
- 10) 小島さやか:文献から見た看護教育におけるポー
トフォリオ評価活用の現状,新潟青陵学会誌, 4
(3),101-109,2012.
- 11) 森田敏子,井上加奈子,吉野拓未ら:看護学生が臨地
実習で経験した倫理的事例の検討」のルーブリッ
ク評価の効果とその課題, 徳島文理大学研究紀要,
第94号29-38,,2017.
- 12) 森田敏子,上田伊佐子:看護教育に活かすルーブリッ
ク評価実践ガイド,メヂカルフレンド社,114-
121,2018.